近くの市民プールの
水泳教室でインストラクターの仕事を始めた私
人妻で子持ちでありながら
〇学生の生徒たちのモッコリした紺色のビキニに
たまらなくなって性的興奮を感じてしまう
そして
次々と男の子たちに筆下ろし
最後は５人の生徒たちに
激しく肉体をぶつけられて・・・
一夏の最高の思い出を作りました

私は現在３６歳の子持ちの主婦です。

この度、私は近くの水泳教室のインストラクターの仕事に挑戦してみることにしました。

息子と娘は成長し、どちらとももう高校生です。手がかからなくなり、主婦としての仕事も時間を持て余すことが多くなりました。

そしてこの夏、私はふと手にした求職雑誌をぼんやりと眺めていて、近くの市営プールで水泳教室の講師の募集がかかっているのに目が留まりました。

実は私は学生時代水泳部に所属しており、泳ぐことには自信がありました。

また、ここ最近女性専用のスポーツジムへ通うようになり、恥ずかしい話ですが少したるんでいた太ももやお腹の肉も無くなって、引き締まった肉体を手に入れたところだったのです。

“スポーツの仕事かぁ・・・・”

なんて独り言をつぶやきながら暫く思案していましたが、その内容と位置的条件があまりにぴったりでしたので、私は思い切って応募に踏み切ることにしました。

仕事をしてみよう！

昨日電話で面接日の予約を入れ、現在はその日が来るのを待っている状況です。

結婚して以来、主婦一筋で仕事とは全くの無縁でしたので、出来るかなという小さな不安と大きな期待によって私の胸がいつになく弾んでいるのを感じています。

【１週間後】

インストラクターの仕事を始めて早一週間が経ち、すでに４日仕事をこなしました。

当然ながら、将来を嘱望されるアスリートの卵みたいな子たちの教室ではありません。あくまで少年、少女たちが楽しく泳げるアットホームな水泳教室の講師ですので、それほどのスキルも責任もありませんし、実際研修も簡単なものでした。

“ある程度泳げさえすればそれでいいです。あとは子供たちと一緒に楽しくやってください”

長年そこで務められている先輩の講師の方にもそう言っていただいて、気持ちが楽になりました。

【１ヶ月後】

水泳教室の講師を始めてから１ヶ月が経過しました。

非常勤のパートとしての立場でありながら、週に４、５回とそこで社員をなさっている講師の方とさほど変わらないほどのシフトを入れてもらっています。

仕事に楽しみを見出し、毎日にメリハリが出来たのは何とも嬉しい限りです。

家庭内は、現在私が昼間おらず家を空けている状態ですが、問題ありません。子供たちは私が専業主婦を辞めたことを特に気にすることなく自由に過ごしていますし、夫も、

“おまえも働きたかったら自由にすればいい。今は女も外へ出て自由に働く、そういう時代だ。”

そう言って深い理解を示してくれています。

そして・・・・。

ここからは一気に恥ずかしいほどに大胆極まりない話になってくるのですが・・・・。

私は、インストラクターの講師をして早１ヶ月で、水泳を生徒たちに教えること“以外”の楽しみを見出しているのです。

決して家庭内では、ましてや夫になど天地がひっくり返っても言えることではないのですが・・・・。

水泳教室の生徒たちはまだ〇学校低学年などの可愛らしい子も多いのですが、実はもう〇学生に入ったわりと大きな子もいるのが現状です。

さすがに２、３年になると皆卒業してしまうのですが、女の子も男の子も〇学１年生の子はまだそれなりに多くここの教室へ通っています。

“〇学生コース”

“〇学生コース”

というような明確に区分がなされておらず、繰り返しになりますが真剣に競泳選手を目指すというような本格的な教室ではありませんので、あるとしても本当に幼い子たちとそれ以外、という区分くらいで、年齢的な区分は実に曖昧になっているのです。

そんなこともあり、ずっと幼少の頃から通い続けていた子たちが成長して〇学生になっても、まだ楽しく教室を続けているというような状況なのです。

良い意味ではとても自由な教室です。

しかし・・・。

すると・・・私はどうしても意識してしまうのです。

そう。〇学生にもなると、生徒の男の子たちの股間はもう立派な男性。

紺色のビキニが、皆一様にモッコリと盛り上がっているではありませんか。

私はあえて目を逸らすように頑張ってはみましたが、私も過去を振り返ってみても人生で一番と言っていいくらい、性欲に体が悶々とうずく年齢に差し掛かっています、否が応でも少年たちの“いやらしく盛り上がった股間”に性的な興奮を覚えてしまうのです。

そして・・・そういった決して外には出せない秘めたる思いは私だけが持つ“一方通行”のものではないようでした。

〇学生の男の子たちもまた、インストラクターで唯一の女性である私にそういった視線を注いでくるのが分かったのです。

彼らは他に男性の講師の方が数名いる時でさえあえて私の元に駆け寄り、教えを請うてきます。

「おばさんっ！！やっぱり俺、うまく泳げないやぁ・・・」

そんなことを言いながら困ったような顔をして上目遣いで私を見てくる男の子。背丈だってほんの少し私より低いだけです。

腹筋は引き締まり、太ももも程良く筋肉がついていて、立派な成人男性の肉体とさほど遜色はありません。

身体能力だって高いはず。その気になれば私よりも早く泳ぐことだって出来るはずなのに・・・・。

まだ子供みたいな雰囲気を醸し出しつつも、彼らの視線が私の胸部や太もも・・・そしてその“少し上”辺りに向けられているのを私はひしひしと感じ取っていました。

――――体験版はここまでとなります――――